



お取引様各位

2022年7月1日  
ユアサ木材株式会社

平素は大変お世話になり、ありがとうございます。  
各地駐在員、エージェントから入りました地域別産地情報を連絡させていただきます。

## No. 232

### マレーシア

#### 1) トピックス (盆踊り大会):

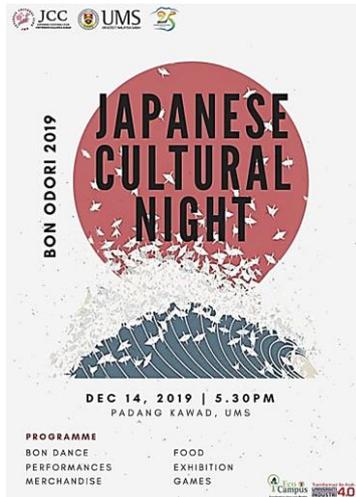
関東地方では6月中に史上最速の梅雨明け宣言が出されて以降、異例の猛暑日が続いている。早すぎる夏が本格的に到来したことを、身をもって感じている。

コロナ禍で引き続き花火大会や盆踊りなどが自治体や主催者などの判断によって、開催されたり控えられたりと判断に差はあるものの、夏の風物詩が3年ぶりに戻ってくることで嬉しい気持ちになっている。

マレーシアでは日本の文化の紹介や交流を目的として、過去40年以上現地で盆踊り大会が開催されてきたが、最近、マレーシアの宗教担当大臣が盆踊り大会への不参加を呼び掛けたことが波紋を広げている。この背景にあるのは、マレーシアはイスラム教が国教であり、盆踊りは仏教に影響されているため、信仰に反するとの見解である。

盆踊り大会は、日本文化への理解を深めてもらおうと、現地の日本人学校や在マレーシア日本大使館が毎年主催しており、邦人だけではなくイスラム教徒のマレー人や華人を含めて3万5000人以上が参加する季節の風物詩であった。

弊社の事務所があるサバ州・コタキナバルでは、UMS(サバ大学)の日本文化研究サークルが主催する「Japanese Cultural Night」が季節外れの12月に行われていた(12月でも気温は夏とかわらないが...)。コタキナバル領事事務所も後援しており、現地日本人会や日本人学校の人たちも招待されてきた。コタキナバルに住む日本人にとって、この盆踊り大会は大きなイベントのひとつだ。お茶会や日本人バンドによるライブパフォーマンスや日本人学校の生徒によるダンスパフォーマンスなどが行われ、ラストには参加者全員で盆踊りというとても素晴らしい交流の場だった。ここ3年は、コロナ禍のため、中止を余儀なくされたと思うが、今年は復活すると思っていたところ、先述の大臣の発言の影響で開催が危ぶまれている。



盆踊り開催のお知らせ（2019年）



盆踊り大会の様

## 2) 木材状況 :

6月は円安の影響もあり、低調な成約状況となった。現地価格は、据え置きであったが、円安に起因するコスト上昇が購買意欲にストップをかけた。現地もまだ原料に関しては潤沢とはいえない状況である。しかし、今の価格でも十分工場の採算は取れているのではないかと想像する。ここに来て、全世界的に引き合いが弱くなってきているように感じている。USA 向け輸出を中心に生産する工場からも、話を聞いてもいいよというような声も聞こえてきた。また、今まではオファー不可能と断られていたアイテムについてもオファーがくるようになり、少し風向きが変わってきた。とはいえ、現在、日本の多くの港湾は混雑しており、在来船では抜港の通知があるなど、業界にとっては、一難去ってまた一難という現状を迎えている。

## インドネシア

現地買い付け状況は、尚も値上げを試みるシッパー側と、円安によるコストアップにて買うにも買えない日本側との間で大きなギャップが生じ、もみ合い状態。妥協点として、現地 C&F 価格は横ばいで決着するが、様子見展開からか、低水準な成約数量に留まった。

2.4 mm x3x6 (2類1等)の販売単価は遂に4桁を越えるレベルとなるも、流石に予想をはるかに超えた未経験の領域において、様子見感が強くなっている。再び流通での買い控えムードが出て来ているが、現状では円高への期待感は薄く、現地側との綱引きが続けば、再び流通にて逼迫した事態に戻る事になり、再度現地側の反発を招く事も考えられなくはない。

さて、6月になり物流面での問題がクローズアップされるようになった。日本サイドでの問題である。ご承知の通り、港湾倉庫での荷物が増え、空きスペースが無い。コンテナのピックが出来ない、或いは在来船での荷役が遅延する等、納期管理も困難となる。現状 C&F 取決めの形態が主体である事から、在来船で

の滞船料は、現地側シッパーの負担となるのが通例である。それ故に、昨今、シッパーからは船積み明細を事前連絡してくるようになり、倉庫スペースが確保された貨物だけが船積みされるという異例（？本来はこれが当たり前なのだが）の事態となっている。とはいうものの、国内にて事前に倉庫スペースを確保しようにも、出荷の見通しが見つからない事から、荷役（倉庫）会社は事前に承諾しない。まさしく『出たとこ勝負』となっている。この問題は、出荷が鈍る8月中旬に向け、さらに深刻になるだろう。

斯様な環境となっではいるが、実はインドネシア合板の入荷量は増えてはいない。5月の通関統計では、逆に減少している。故に、いまだに欠品アイテムが出る訳である。上海ロックダウンが解除されたことで、他の貨物（木材製品のみならず）が一斉に入荷して来た事も、港湾倉庫を圧迫している要因にもなっている。問題のしわ寄せが輸入合板に来ているのだ、と言いたい。『倉庫逼迫』が販売単価に対して余計な誤解を持たれ兼ねない、と危惧するところである。

前段で述べた通り、インドネシア合板については、薄物と言われる2.4mmについては、他に代替品がない為、綱引きが長引けば、再びミニウッドショックが起こる可能性は否定出来ない。輸入木材製品の倉庫スペースが少ない点も少し考えてみたい。かさが張り、丁重に扱う割には。。。木材の価値はこんなものなのだろうか？ 850円の全部入りラーメンを食している時にふと思う時がある。ウッドショックを招いた要因を再度考えるところである。

ところで、インドネシアは世界有数の資源大国である。石油・石炭・天然ガス・銅・ニッケル等は豊富に産出され、また豊かな農林水産資源を持つことから合板・エビ等は世界各国へ輸出されている。今、ウクライナ侵攻でロシアからの資源輸出が制裁を受けて制限される中、代替供給国としてのインドネシアが注目され、今や資源輸出業者に世界からバイヤーが集まり、熱狂の渦にある。そういえば、給付金詐欺でインドネシアへ逃亡した日本人はエビ養殖業に手を出していたと聞く。これは儲かる商売だ！と、さぞかし目を輝かせていたのであろう。また驚くなかれ、新たにラワン合板工場が誕生した。タイミング的には、吉と出るか凶と出るか？残念ながら、合板製造については、インドネシアでは斜陽産業と言われて久しいのであるが、新オーナーも一発当てたいとギラギラと目を輝かしているであろう。健闘を祈りたい。

インドネシアの国土面積は日本の約5倍、人口はこの60年で3倍に増えて2.7億人、また平均年齢は29歳と若く、日本の平均年齢49歳とは比べようがない。

豊富な資源は開発途上にあり、未来に向け無限の可能性を秘めた国だと改めて思い知らされる。

まさに、アグレッシブで魅力的なである（ともに仕事ができると感じる人が多い）。

## 中国

中国産針葉樹合板の入荷は、一時逼迫していた国産構造用合板の良き代替品となった。それによって救われた業者は間違いなく多数いる事だろう。しかしながら、中国側も日本での品薄感を察知するや否や、ポット出のJAS取得工場も現れ始め、それが時に品質問題を引き起こす事にも繋がってしまった。

そして、その情報の一側面だけを拾った人々の心理は、見事に中国製品に対してマーケットクレームを起こし始めるに至るわけである。何故、あまり知られていない業者から商品を購入してしまうのか？ 何故、思惑買いをしてしまうのか？ これに対しては、大いに人間の深層心理が働くのだろうが、現在これが一つの原因となり、荷動きに支障を来し滞留在庫につながることで、日本の倉庫はどこも手一杯の状態となってしまう。

もちろん各倉庫の「満床状態」は、これだけの原因だけではないのだが、中国産針葉樹合板の入荷増は、現状、倉庫逼迫問題の原因の一つである事には間違いない。中国産針葉樹合板は、契約残がある以上は、まだまだ積まれてくるのだろうが、本質を満たさない風評被害のようなものは、出来る限りやめて欲しいところである。倉庫問題も絡んでくる為、これは切実な願いである。また今後においては、現地生産側の正しい情報や、工場側と輸入元との精通具合を見極めた上で、適正な価格帯を見出し、国産材と海外産の双方で、正しく需要を満たして行きたいものである。

日本が他国に比べて安い国（物価の低い国）と言われるようになって久しい。実感が湧いていないのは、まだまだ日本の古き良き時代（1980年代～1990年代）を知っている人が多く居る事と、やはり平和ボケしてしまっているせいなのだろう。最近久しぶりに、海外からの観光者が一部地域で見られるようになったが、3年前の活況具合に比べればまだまだ程遠い。当時、爆買いなんて揶揄された中国人観光者たちだが、てっきり日本製の良い物をたくさん買って中国に持ち帰り、それをあたかも自慢する為のものであると信じ込んでいた日本人は今でも多数いるだろう。

現実には、そういう目的で購入した人も若干いたのかもしれないが、違った。自国で買うよりも日本で買った方が安いから、たくさん購入していたわけである。そして今後はモノだけではなく、安い隣国日本から、あらゆるものを大きな口を開けて飲み込んでいく事になるのだろう。モノだけではなく、ヒトもサービスも、カネも。

ヒトを例にとれば、日本に進出する中国企業は、学卒の初任給が企業によって差はあるものの、概ね40万円程度で募集を掛ける（IT関連企業の例です）。日本の学卒の初任給は、20万円程度であり、この水準は何年も前から大きく変わっておらず、またそれに対し文句も出ないどころか、それが当たり前だと誰もが思っている。我が国は、各国が真似する事ができないほどの強烈な社会主義体制が整っている。

日本企業への就職を夢見る学生たちは、ニュースが報じる一つの側面だけであり、中国企業だけではなく、外国企業への就職が年々増加しているのが現状である。主に専門系（理工系、医学系、薬学系等々）の学卒者がターゲットとなり、各国企業から多額の金額のニンジンをぶら下げられて、有能なヒトが取られていくのである。有能な人間が見えないところで吸い取られ、我々は海外からの安い労働者をどのように雇用するかを問答している。このままでは、まずくないか。

超高齢化社会を迎え、それがますます深化してく日本は、次なるステージで年金不払い問題が起きないように、ゆっくりと手立てを踏み、少しでも年金支出を減らす為に策を講じている。そのゆったり感あふれ

る政治体制の中で、年々有能な若者たちが海外へ飛び立ち、今後 AI 化を加速させて行かないといけないこの時代に、海外からの労働者を呼び込み、安い賃金でこれまで通りの現場仕事をさせて、何とか凌ごうとしている。そんな無能な策を真顔で講じているわけである。各企業やお役所で、椅子に座っているだけの年金予備軍に金を払うなら、吸い取られる若者たちに金をつぎ込み、有益な企業とヒトを創出し、かつてのように日本企業が金を生み出し、各地からの収入を上げて行く事に重きをおくべきだと強く思っている。

中国産針葉樹合板を小馬鹿にし、国産針葉樹合板における目先の利益だけを追う事に注力する日本だけでは、さらなるガラパゴス化が進み、最後には「孤立国家」となってしまうのではないかと、とも思ってしまう。あるいは逆の発想を抱いてみるのも面白いかもしれない。海外からのインバウンド収入に最大の重点を置き、海外からの観光客誘致を各地で目指していく。世界中から懐かしき良き時代を求めて、安全で安心な国にやってくる。「日々の疲れを癒しませんか」というスローガンを日本中で掲げて。

## ベトナム

梱包資材商品の動きが低迷し始めてからだいぶん時が経った。例年からすれば、4月～6月は年間を通して一番動きの悪い時期なので、例年通りといわれてしまえばそれまでなのだが、今年は倉庫事情が絡み、こうした動きの悪い中でも、早く倉庫から出荷をしなければ、新たに入港する商品の入庫が叶わない事情が重なり、二重苦の様相である。

これまでは船運賃の高騰で苦しみ、今回は倉庫問題で苦しみ、さらに急速な円安である。現地側からのある程度の価格譲歩を期待するが、梱包資材は相場商品では無い為に、若干の下げはあっても、それが販売価格に大きく転嫁できるとは考えにくい状況がしばらく続きそうだ。

約2か月前の4月30日。この日はベトナムの戦勝記念日であった。街の至る所にベトナム国旗と北ベトナム国旗が鮮やかに掲げられ、見る場所によっては赤一色に彩られる、まさしく国家をあげた祝いの日なのである。とはいえ、概略としては北ベトナムと南ベトナムにおける内戦の様相であった事から、現在のベトナム国内では、戦勝記念日を大々的なお祭りごととして捉えるような風潮は無く、街の彩りとは打って変わってニュースでは厳かに報じられる。

戦勝を喜ぶ北ベトナム側に対して、南ベトナム側は敗戦色を残す事になった為、複雑な人間感情が残るベトナム国民に配慮した形を取っているのかもしれない。アメリカ軍が南ベトナムに進出を始めた当時、誰もがアメリカの一方的な攻撃力により南ベトナムの圧倒的な勝利で幕を閉じる事を予想していた当時のベトナム戦争。結果的には南ベトナムに拠点を持っていたベトコン（北ベトナム支援の南ベトナム解放民族戦線）により、南ベトナム側の拠点が崩されていく。さらには南ベトナム側の情報が北ベトナムに伝わるルートが着実に確立されて行き、終盤にはゲリラ戦が展開されるようになってしまった。

長引く消耗戦は、双方に大きな損害を出し、多くの悲劇を生む事になった。戦争開始当時、アメリカ側からすれば、はるか彼方の戦いであり、国内でベトナム戦争における情報が部分的にしか入らず、ベトナムで戦争を行っているという事すら、知らなかった（興味が無かった）国民もいたぐらいである。しかし時の経過とともに、当地から伝えられてくる悲惨な状況や帰還兵の証言により、世論がベトナム戦争終結へと向かって行った。

この手の話をベトナムでした事は何度かあるが、教育の問題からなのか、彼らの関心がないのかは分からないが、あまり熱を帯びて話をする人もいなければ、逆に我々日本の戦争話を聞いてくる事も殆ど無い。何故なのか？ は少し考えてみれば誰でも分かる事なのだが、当時の私は分かっていた。これは、我々が話をする相手が30代から40代が多いからなのだが、まさに彼らの親世代がその戦争に加わっていたわけであり、あまり話をしたくない、思い出したくない、という事が大いに関与しているのだと思われる。

ベトナムの知人に聞いた話だが、まさに自分の親は、この戦争で亡くなったと聞いた。興味本位で聞いたわけではないのだが、私の場合、戦争を体験した世代が祖父母であり、戦争体験を知っている層が、ベトナムに比べればかなり高齢となる。ベトナムの場合、戦争体験は自分と比較すれば身近な出来事であり、まさに自分の肉親がという世代に当てはまっている為に、我々が抱く戦争感情とは大きく違う可能性がある。話を聞く場合には、人によっては配慮が必要な瞬間もあるのだろう。

ベトナムの平均年齢は31歳と若く、人口別の構成比もいびつである。ベトナム戦争により多くの戦死者を出した為、ある年齢層からポツカリと抜けている世代がある。それが普段付き合っている彼らの親世代の為、自分事として捉えた場合、「アメリカに勝って強いよなベトナムは」、なんていう軽々しい発言をしてしまった過去を憂いている。

地震や洪水といった災害は人の力ではどうにもならない事なのだが、戦争は唯一、ヒトが引き起こす災いである。ヒトが起こしたものは、ヒトの手で必ず終わらせる事が出来る。一部の人間の利権というつまらない欲求だけで、多くのヒトが災いを被る戦争というものは、やはり辞めるべきである。

歴史が浅い国ほど、各国から多くの歴史を学ばないといけない、と強く感じている。

## ロシア関係

AA) トピックス :

1) 「彩り」 :

Mr. Childrenによる名曲「彩り」に、「僕のした単純作業が この世界を回り回って まだ出会ったこともない人の笑い声を作ってゆく そんな些細な生き甲斐が 日常に彩りを加える モノクロの僕の毎日に 少ないけど 赤 黄色 緑」の歌詞がある。それに続く歌詞も意味深だ。「今 社会とか世界のどこかで起きる大き

な出来事を 取り上げて議論して 少し自分が高尚な人種になれた気がして 夜が明けて また小さな庶民」。

村上春樹の中編小説「色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年」では、主人公多崎つくるとが一方的に親友4人から絶縁を宣言され、後に彼は絶縁の理由を求め、元親友たちを訪ねるストーリーが展開される。次々と明かされる絶縁の真相と深まる謎と衝撃の結末。親友4人の苗字には、赤、青、白、黒の漢字が含まれていた（その他の登場人物の名前にも黄、灰、緑の漢字が入っている）。多崎は自分だけに色の漢字がないことに疎外感を覚えていた。その一方で、色はないけれど、「多」を持つ多崎は、他人を受け入れて多彩な色彩を生み出せるオールマイティーな存在ともいえ、多崎が色を失うと周りの人間も色彩を失ってしまう。

米国の女性歌手、シンディ・ローパーの曲「トゥルー・カラーズ」(True Colors)。ここにある Colors は、当初、色彩のことだと思っていたが、国旗、記章、徽章、紋章、制服などを意味していると後に知った。そしてそれは、人を識別する「個性」、「内面」、「人となり」という意味も持つ。つまりこの歌は、我々がふだん口にする意味の色彩というのではなく、人が備えているその人なりの「Colors=個性」を愛しているということになる。仏教の教えと同じだ。仏教が意味する「色」は、無限に変化する物事の本質的な姿の在り様と解されている。これは自然界に存在するもの、水や木や石、人も動物も植物なども同様に、全ての物事の備えている特性のことだという。人を言い表す「十人十色」という、人が十人いれば十人なりの個性「色」があるという意味の言葉はここから出来上がっている。

香港で繰り返されてきた民主化デモ。ここで見る色は、デモ隊支持を意味する「黄」と親政府派の「青」。黄色は 2014 年に民主化を求めた雨傘運動の際に使われた黄色い傘、青色はその運動に反対した人がつけた青いリボンに端を発するといわれる。

色について長々と述べ過ぎた。色には視覚的に目に入るもの、心の移り変わりを表現するもの、他と区別するもの、連帯を示すものなど、「色々」な意味合いを持たせることができる。

白紙のカードを掲げただけでも連行されるようになったロシア。ロシアのウクライナ侵攻に抗議する市民デモは当局によって強制排除され、逮捕につながるため、市民は安全な反戦運動の手法に頭をひねり、当局との知恵比べを展開している。そのひとつが各地の街角で飾る緑のリボンである。ロシア各地の大都市で無言の抗議活動が行われている。街角にある階段の手すりや橋の欄干に緑のリボンが結わえ付けられ、それが風に揺らぐ様子がテレビニュースに映し出されていた。当局による厳戒態勢の傍らで風に揺らぐ緑のリボン。この対照的な光景を見たとき、一服の清涼剤を得た自分に気付いた。

いかに規制を回避しながら戦争反対をロシアの街角で展開していくか。先に述べた白紙のカードでさえ反戦のメッセージとみなされ身柄を拘束される事態が多発していた状況下に登場した新たな反戦ツール。これらの意思に賛同したい人々は、緑のリボンを街中で結び、すぐにその場を立ち去る。洋服にリボンをつけていると、その印を見つけた当局に拘束されてしまう。風に揺れる緑のリボンが反戦の印だと分かっていても、そこには既に活動家の姿はなく、逮捕しようにも叶わない。



(NHK より)

運動のシンボルとして緑色が選ばれた理由には諸説あるらしいが、ウクライナ国旗に由来する説が有力だ。ウクライナ国旗にある青と黄色を混ぜると緑色になる。本来ならば、青と黄色の2片のリボンを重ねれば直截的に主張することが可能だが、当局からの監視が容易になる。つまり混色することで婉曲的に表現し抗議しようとする意図がここにある。他にウクライナのゼレンスキー大統領が愛用するカラーを採り入れたとの説もある。2019年の大統領選でゼレンスキー氏は陣営のシンボルカラーとして緑を採用していた。

当局の監視の目を逃れるための反戦活動のひとつは、先月ご紹介したロシア国旗のひねりにもあらわれていた。ただ、国旗であるがゆえにロシア国内での活動は憚られている。その意味でこの「緑色のリボン作戦」は、なかなか「乙なもの」である。

いずれにせよ、ロシア市民の中にも、政府のプロパガンダに踊らされることなく侵攻を是としない人々は確実に存在している。

## 2) 「ロシア・アヴァンギャルド芸術」 :

かつて池袋西武百貨店はサブカルチャーの最先端の発信基地だった。糸井重里のコピー、「じぶん、新発見」、「不思議、大好き」、「おいしい生活」にみられる芸術的な雰囲気醸し出すこの百貨店内にあった西武美術館は、筆者のお気に入りの場所だった。都会の空気に溶け込んでいることを自慢したいがために、すべて理解できているわけでもないのに芸術作品にふれている自分がイケてると思ったのかもしれない。

1982年にこの美術館で開催された「芸術と革命（искусство и революция）展 ロシア・アヴァンギャルド芸術の流れ」のことを思い出している。アヴァンギャルドとはもともとフランス語で「前衛」とか「最先端に立つ人」を意味し、芸術の分野では、革新的な試みや実験的な試みを指すことを知った。美術だけにとどまらず、音楽や映画、演劇、文学などの分野にもアヴァンギャルドと呼ばれる表現方法が存在している。

### 「赤い楔で白を打て」



ロシア・アヴァンギャルドは、1917年に起きたロシア革命の最中に生まれた芸術運動である。このロシア革命の混乱の中でこの運動は政治と結びつき、多くの芸術家たちは、「プロパガンダ・アート」を作り出す。最近よく耳にするプロパガンダとは、端的にいえば人々の思想や行動を誘導する宣伝のことで、日本でも戦時中によく使われた。プロパガンダについては、この項で詳述することは避けるが、自分なりに解釈するとドーピングのようなものだ。何かしらの目的のために人々

を鼓舞するために使用されるが、いずれそれは時間とともに醒めてしまい、正気に戻ったときには、がっかりしてしまうことが案外多い。

この美術展でさまざまな作品を観たが、正直なところあまり理解できなかった。ただ、革命という言葉が放つ「ドーピング効果」によって、胸が騒いだことを思い出す。そこで買った目録を狭い自室でクラシッ

ク音楽を聴き、酒を飲みながら紐解いた。中でもグラフィックデザインの祖といわれるほど、数多くの革新的なデザインを生み出したエル・リシツキーの作品「赤い楔で白を打て」には心が躍った。

この作品の意味するところは、革命政府が赤、旧ロシア帝国が白で、シンプルな構図の中に隠された鮮烈で強烈なメッセージが読み取れる。この作品をみていると、いろいろと想像力を掻き立てられる。「今」をこの作品に投影することもできる。

このロシア・アヴァンギャルド芸術は、スターリンの「文化革命」による政治的抑圧（いわゆるフォルマリズム批判）や難解さに起因する一般大衆からの社会的支持の喪失、芸術運動そのものの行き詰まりなどの要因によって、1930年代に終息した。

#### BB) 産地現状 :

5月末時点の首都圏のロシア製品の在庫数量は42,000m<sup>3</sup>と対前月比で減少している。期近のデータをみると、その数量は一層減少傾向を示している。今後の入荷量だが、夏場という端境期、また対口貿易に携わるプレイヤーが減っていることもあり、減少していくことは間違いない。「紛争木材」であるロシア製品を取り扱うことに憂慮するユーザーも一部出始めていることで、需給は一段下がった水準でバランスするのではないかとみられる。いずれにせよ、ウクライナ情勢が影を落としている状況下では、先行きを見通すことは非常に難しい。ロシア材だけに限らず、多くの木材製品の荷動きが鈍くなっていることから、今後はより急がず需給状況を見据えた手当てに留めようとする事が予想される。転換期が訪れたとみるべきだろう。

先日、経済産業省は、ウクライナ侵攻を続けるロシアへの追加経済制裁を発表した。今回の中身は、米国やEU諸国と足並みをそろえたもので、追加禁輸項目も欧米諸国の品目を追認したものになっている。木材関連では、化粧貼り用単板、合板用単板などが輸出禁止となるが、いずれも対口輸出実績がないことから、影響はないとみられる。問題は機械関連で挙げられている「木材、コルクなどの加工機械及び部品」である。ロシアの対日向け木材製品を生産するメーカーへのメンテナンス用も含めた部品の輸出ができなくなるため、長引けば長引くほど、現地の工場の中には操業継続が危うくなる場所も出てくる可能性がある。

## ニュージーランド関係

#### AA) 商況/産地現状 :

3カ月近く続いた中国・上海のロックダウンは6月初めに解除されたが、市民の日常生活にはまだ一定の支障があるという。このロックダウンの影響で、上海周辺の本木の荷動きは悪い。NZラジアタ丸太もその例に漏れず、それに伴い価格も下落傾向を示している。因みに今年1~4月の中国の丸太輸入量は前年同期比で30%以上減少。特にNZ、ドイツ（虫害材など）、ロシア（高関税の賦課により今年から実質禁輸）からの輸入量が大幅に減少している。この丸太輸入量の減少分は製材品輸入を増やすことで補完している。

一方、対日向け産地価格だが、中国向けは下げに転じたものの\$190~195 と、前月比で\$5 ほど下がったが、船運賃の高騰やバンカーオイルの上昇、さらに著しい円安推移で仕入コストは想定よりも下がらず、逆に膨れ上がった。このため、これまでも何度となく繰り返されてきたように、日本の NZ 国内挽き大手製材メーカーでは、製品の値上げが唱えられ、各メーカーとも値上げの足並みがそろってきたという。梱包業者は丸太価格上昇を鑑み、製品価格の値上げ提案に理解は示しているが、荷動きは低調だという。

先行きの丸太産地価格はどう推移していくか。中国のロックダウン明けの景気回復や船運賃高により、仕入コストは今後も高まることが懸念される。何はともあれ、従前通り中国次第という図式は変わらない。

BB) トピックス :

1) 「オールホワイツ」 :

サッカーのニュージーランド代表チームは、上下白色のユニフォームから、「オールホワイツ (All Whites)」というニックネームで知られている。これは、1982 FIFA ワールドカップに初出場した際に公募で名付けられた。オールホワイツという名称はラグビーNZ 代表の愛称・オールブラックスと対になるような形で定着している。因みにこのスペイン大会ではスコットランド、ソ連、ブラジルに3連敗を喫しグループ最下位で敗退している。

NZ ではラグビーとクリケットの人気の圧倒的に高く、優秀な人材のほとんどがそちらに流れるためサッカーはさほど盛んではない。代表メンバーも大半がアマチュアもしくはセミプロである。だが、長年にわたり最大のライバルともいえるオーストラリアが OFC (オセアニアサッカー連盟) を脱退し、AFC (アジアサッカー連盟) に加盟してからは、オセアニア地区では強豪国としての地位にある。そして、オーストラリアの AFC 加盟後の 2010 年ワールドカップ南アフリカ大会予選以降は、毎回大陸間プレーオフへの進出を果たしている。そして、同予選プレーオフで AFC のバーレーンに勝利し、28 年ぶりの本大会出場を決めた。本大会ではグループリーグで敗退し、決勝トーナメントには進出できなかったものの、イタリア、スロバキア、パラグアイを相手に 3 試合を全て引き分け、出場 32 カ国中唯一の無敗という前評判を上回る成績を残した。

さて 2022 FIFA ワールドカップ大陸間プレーオフ。このゲームに勝利すれば、既に大会出場が決まっている日本代表と本大会で初対戦することになっていたが、結果的にコスタリカに敗れてしまう。開始直後の前半 3 分での先制点を許したことが最後まで響いた。途中退場者を出し、数的不利の状況に陥っても最後まで諦めず攻め続けたオールホワイツ。日本代表との対戦を楽しみにしていただけに残念だった。



サッカーNZ 代表「オールホワイツ」  
(ハフィントンポストより)

ところで、40 年近く使用してきた「オールホワイツ」の愛称変更が検討されているという。マオリなどの

有色人種に配慮し、「ホワイト」が適正なのかとの意見である。インクルーシビティ（Inclusivity）という言葉がある。日本ではまだ耳慣れない言葉だが、直訳すると「包括性」というような意味。これまで社会的に無視されがちだった人種、性別、体型、障害などマイノリティな人々やコミュニティを排除することなく、全ての人を同じグループの一員として考えていくという概念だ。このインクルーシビティを重視すべきではないかというもの。関係者は、「オールホワイツという名前は文化や人種にちなんで名付けられたものではない」と指摘しているが、今後果たしてどうなるか。

ブラック・ライブズ・マター運動など社会全体で差別をなくす動きが強まる中、スポーツチームの名称変更が相次いでいる。NZ ではラグビーチームのクルセイダーズが、十字軍の騎士をイメージしたロゴから、マオリをテーマにしたロゴへの変更を発表した。また、米国ではアメリカンフットボール・リーグ（NFL）のワシントン・レッドスキンスが、「レッドスキンス」という名称とロゴの使用を終了するとした。さらにメジャーリーグではクリーブランド・インディアンズが、ガーディアンズに名称変更した。どちらの名称も、アメリカ先住民に対して差別的だと批判を受けていたことによる。

以前の産地情報で、ポリコレ（ポリティカル・コレクトネス＝政治的正しさ＝）妄信と行き過ぎについて疑義を呈した。その点から歴史や文化に根差した名称は、ダイバーシティ（多様性）を重視する世の中のトレンドを考えると、ある程度の許容範囲を設けることもひとつの考え方ではないかと思うのだが、如何なものだろうか。

## 2) 「NATO 首脳会議と 4 カ国首脳会談」 :

6 月末にスペイン・マドリードで開かれた北大西洋条約機構（NATO）首脳会議への日本政府の出席に合わせて、現地で日韓豪と NZ による 4 カ国首脳会談の場が設けられた。いずれも NATO の「アジア太平洋パートナー」である 4 カ国の首脳が連携を確認し、対中国を念頭に安倍元首相の提唱した「自由で開かれたインド太平洋戦略」を推進する狙いがあるという。

岸田首相は、日本の首相として初めて NATO 首脳会議に出席したわけだが、同会議には韓国の尹大統領、豪州のアルバニー首相、NZ のアーダーン首相も招待されている。その後行われた 4 カ国首脳会談では、中国を念頭に入れ、東・南シナ海での一方的な現状変更の試みに反対する意思を結束して示した。日本が力を注いできた中国の影響力の拡大する太平洋島嶼国への支援策も議題となった。

この一連の行動は、ウクライナ情勢の対応に注力する NATO 各国に対し、アジアへの関心を高める狙いもあるという。一方、中国は、日米豪印の枠組み「QUAD」（クアッド）に対し「インド太平洋版の NATO」（王毅國務委員兼外相）と反発している。NATO の「アジア太平洋パートナー」4 カ国の首脳会談が今回実現することで、中国を牽制する枠組みが出来上がることになる。

尚、今回の会議で NATO 加盟国は、ロシアについてこれまでの「戦略的パートナー」から「最も重大で直接的な脅威」と位置付けた。また、かねてから NATO 加盟を求めていたフィンランドとスウェーデンの加盟手続きが開始されることになった。両国の加盟に難色を示していたトルコだったが、同国が懸念するクルド問題を巡る「外交懸念」と引き換えに、最終的には加盟支持に合意した。

ロシア・プーチン大統領は、この北欧 2 カ国の加盟については警戒感を示し強く警告したものの、「両国とロシアの間には領土問題もなく脅威も与えていない」と「大人の対応」を示す一方、ウクライナの NATO 加盟については断固としてこれは認めないと外遊先で語った。

## 欧州関係

AA) トピックス :

1) 「見える化への疑問」 :

脱炭素社会を目指す動きが世界中に広がっている。CO<sub>2</sub>の排出規制、化石燃料の使用抑制など、2050 年のカーボンニュートラル実現に向け、さまざまなルールを欧米諸国が主体となり策定している。それを主導する欧米諸国の「独善的な横暴」については、これまでの産地情報で度々述べてきた。地球環境保全という錦の御旗が掲げられると、それに反駁し難い状況が自ずと出来上がっていく。理想と現実の乖離をいかに織り込んで推進していくかの難しさ。産業革命、IT 革命に次ぐ利益のネタとして注目されているグリーン革命だが、筆者はそこに先進諸国の「まやかし」があると思っている。SDGs や ESG の本質は決してそこにはないはずなのに・・・。

最近興味深いニュースに接した。スウェーデンの金融大手が、自社グループの運用するファンドで兵器開発など防衛に関連した銘柄に投資できるようにしたというものだ。防衛産業は多くの ESG 投資の対象外だったが、ウクライナ危機を受けて核兵器を除く通常兵器を「持続可能な社会に必要」として、投資基準を改めた。ここにもるように、この ESG すら「まやかし」と思ってしまう自分がある。

地球環境保全を目的とするグリーン革命と、今のロシアのウクライナ侵攻においても表面化している戦争による環境破壊とをどうみていけばいいのか。NATO 加盟国が中心になってウクライナに武器を供与することが、停戦交渉よりも戦争の膠着化と長期化を望んでいることにつながることに気付かないのか。ウクライナを支援するという美名の一方で、ロシアの弱体化が主目的に変わってしまっていないのか。米国の軍需産業は空前の利益を上げているという。米国政府によるレンドリース法（武器供与法）をみるまでもなく、長期化する戦争がウクライナの土地の破壊や人的被害を招き、ひいては地球環境を毀損していく。まずは停戦を・・・。

見てきたようなウソを言うという言葉がある。今、ロシアとウクライナの戦闘にかかる情報を日本の私たちは「西側」発信のメディアを通じて受け取っている。ウクライナにおける報道が本当に正しいのか否か全く疑いもせず、感情に流され敵はロシアだと言わんばかりに鵜呑みにして・・・。今回のテーマでは、このようなメディア・リテラシーやら「フェイク・リテラシー」ではないが、何かに振り回されることのない確固たる信念というか信条を個々人が持つべきではないかと考えてみたかった。

最近世間でよく話題にのぼる承認欲求。皆が「いいね」を欲しがると。その相手を説得するための手段のひとつがプレゼンだ。それには「見える化」が有効的だとされている。数値化すれば見てきたようなウソも

まかり通るといえるのは言い過ぎかもしれないにしても、それに近い形で実証されてしまうことがよくある。コロナ対策時によく使われた数字の魔力。コロナ禍中では必要以上に数値をあげて「見える化」を施したのに、今まで何度となく流行していたインフルエンザ・ウイルスについては、特に具体的な実証がなされないままスルーしてきた……。これは「見える化」流行りの世の中を反映しているからなのだろうか（世界中で流行した疫病への注意喚起のため、最も有効な手段という側面は当然あろうが……）。人々は数字に振り回され、同調圧力をかけ、相互監視社会を作り上げていく。要所要所では「見える化作戦」は有益なのだが、過剰可視化社会には正直のところいい気はしない。人々は何かに怯え、恐れ、しきりに攻撃的になっていく。そのような過程に陥っていくのは想像力が欠如しているからだろう。これでダイバーシティは育っていくのだろうか。

コロナ対策や脱炭素運動。全人類や地球がこの大きな流れに乗っかろうとする極端な語り口。数値で見える化されたものに対する過剰な反応や「正しく美しい理想」を実現しようとするに水を差すように足を引っ張る者は人でなしだとする考え方は、まさにスターリニズムを基盤にするようなプロパガンダに他ならない。科学の進歩は人間の本質や根本を本当に変え得るのか、疑問を抱いてしまう。

## 2) 「ジュビリー」 :

英国で6月初め、エリザベス女王の即位70周年「プラチナ・ジュビリー」の4日間にわたる祝日があった。エリザベス2世は1952年、父のジョージ6世の死去を受けて即位した。今年2月6日に70周年を迎え、英国史上、最も在位期間の長い君主となった。彼女は、カナダやオーストラリア、ジャマイカなど15カ国からなる英連邦王国の君主でもある。

浅学菲才の私は、恥ずかしながらジュビリーという言葉が知らなかった。少し調べてみた。ジュビリー (Jubilee) とは、君主の生涯とその治政を祝う祝典のことで、聖書に出てくる「ヨベルの年」(The Jubilee year) に起源があるという。そのヨベルの年とは、旧約聖書の中の「レビ記」に出てくる言葉で、土地を7年ごとに休ませる安息年が7回巡った次の年の50年目の年を指し、富の偏在が是正される「原状回復」を意味する年のことらしい。辞書には単に25年、50年などの記念祭、もしくは歓喜と記載している。

語源はこれぐらいにして、ジュビリーでは在位期間の節目を祝っている。女王はこれまでに、1977年(即位25周年)の「シルバー・ジュビリー」、2002年(即位50周年)の「ゴールデン・ジュビリー」、2012年(即位60周年)の「ダイヤモンド・ジュビリー」を祝っており、今回が4回目となる。エリザベス女王は1926年4月21日に生まれた。ただ、公式の誕生日として6月の第2土曜日が制定されている。これは女王の曾祖父に当たるエドワード7世からの伝統で11月生まれのエドワード7世が、公の祝典を気候の良い時期に行いたいとして始めた。

ジュビリーの年には年間を通じてさまざまな公式の式典が計画されているが、主要な祝典は6月初めの4日間の祝日に集中する。これには、女王の公式誕生日を祝うパレード「トゥルーピング・ザ・カラー」も含まれる。これは軍隊を意味するトゥルーブ (Troop) の現在分詞のトゥルーピングに、軍隊の色を示すカラーを加えた言葉で、これをみせながら行進するという意味になる。また、この4日間には、イギリス全土で屋外でのストリート・パーティーが開催される。通常は日付が変わる前に閉店となるパブやバー、ナイトクラブなども午前1時まで営業する。



「トゥルーピング・ザ・カラー」のバルコニーへの登場 (SPUR. JPより)

ところで、エリザベス女王の王位継承者は、第1子のチャールズ皇太子。2位は皇太子の第1子のウィリアム王子、第3位は同王子の第1子のジョージ王子となる。その後はシャーロット王女とルイ王子が4位、5位と続き、現在の6位は、チャールズ皇太子の第2子であるヘンリー王子だ。チャールズ皇太子は王位継承者として、エリザベス女王が病気などで公務を行えない場合の「臨時摂政」を担うことがある。5月には、女王が議会の開会式を59年ぶりに欠席した際、女王の代わりに開会を宣言した。

先に述べたパレード「トゥルーピング・ザ・カラー」の王室イベントに、英王室を離脱後初めてヘンリー王子とメーガン妃が参加していた。それ以上に目を惹いたのは、王室メンバーのファッションだ。ヘアメイク、ドレス、そして個性溢れる色とりどりの「帽子たち」。まさに華やかな光景が広がっていた。

#### BB) 欧州産地状況 :

首都圏の欧州製品の5月末時点の在庫量は約57,000m<sup>3</sup>程度と先月とほぼ同じ。荷動きはGW明けから緩慢になってきたが、6月に入って鈍さが目立ってきたように感じる。さらに欧州を含め、海外産地からの輸入材の入荷は、ロシアのウクライナ侵攻以降さらに生じる海上輸送の混乱、積み替え地である中国・上海のロックダウンによって遅れが生じていたが、時間とともに輸送の回復がなされつつあり予想よりも順調になってきた。そして日本の各地の港の倉庫は満杯で置き場に苦慮する状況が生じている。

欧州材製品について、春先までは製品確保に緊張感が走ったが、今は徐々に荷もたれ感が出始めた。このような状況の中で始まったWW間柱、及び第3四半期の集成材契約交渉。集成材は日本市場において、足元の在庫が多いことや、国内の需要に先行き不安が漂ってきたことから、できるだけ購入量を抑えたいとの意向が強い。しかしながら、産地は北米向け輸出にこれまでのような迫力がなくなったことや、欧州市場の需要も落ち着いてしまっている状況を受け、「健全」な日本市場向けへの供給量を増やしたいと考えているようだ。需給にミスマッチが生じている。価格面だが、産地サイドは日本市場が受け入れられやすい水準にまで調整する方向性を示している。ただ、ユーロ高円安急進により輸入コストは前回時とほぼ同じと、引き続き高値水準。

WW間柱のような羽柄材は、集成材に比べ競合する商品が限られていることから、日本市場においても堅調な市況を形成するとの予想だった。しかしながら、7/8月積み交渉では供給数量が思いのほか、増えるとの見通しが広がり、市場価格に不安感が出始めてきた。バイヤー筋では、先行きの需要が落ちていくのではないかとの景況感から、数量を絞ることを考える向きもあるが・・・。

## 北米関係

AA) トピックス :

1) 「銃規制論議」 :

今年5月、米国テキサス州の小学校で起きた銃乱射事件。繰り返される同様のニュースに接するたび、いつもやり切れない気持ちでいっぱいになる。事件発生の理由は千差万別であるが、なぜなくなるのか。今回最もショッキングだったことは、事件で生き残った女子児童が連邦下院で証言した内容だ。同級生の血を身体に塗りつけて死んだふりをしたことや、担任教師が殺された瞬間などを語った。彼女は「犯人は先生に“Good Night”と言ってから先生の頭を撃った」、「それから同級生も何人か撃たれた」とも述べた。この事件で犠牲になったのは児童19人と教師2人。米国ではこれをきっかけに、銃規制をめぐる議論が再燃している。しかしこれまで、厳しい銃規制を敷こうとする試みは停滞してきたことを考えると果たしてどうか。

下院では当日、銃による暴力の問題に関して委員会が開かれ、彼女が事前に収録した証言動画が流れた。彼女はまず、教師が犯人の姿を見た後、児童たちに隠れるよう指示したと語った。児童たちが机の下などに隠れた後、この教師は18歳の犯人に殺害された。また、彼女自身も、襲撃の際の破片で肩や頭にけがを負った。死んだふりをした後、教師の携帯電話で警察に通報したという。そして、前述の言葉を発した。

彼女は「こういうことはもう起きてほしくない」と述べたが、父親は、彼女がこの事件でトラウマを負っていると語っている。あまりにも理不尽で不幸な事件を、銃規制に反対する人たちはどう考えているのだろうか。米国では建国以来、自分の身は自分で守るのは当然で、銃を所持する自由を阻害すべきではないという意見が多くを占めている。ただ、市民から銃規制を求める意見が増え始めてきたことで、与党・民主党が多数を占める連邦下院は、半自動小銃の購入年齢を18歳から21歳に引き上げる法案と、大容量の弾倉を禁止する法案を可決した。ただし、野党・共和党と拮抗している上院を通過する見込みは低いという。

実際のところ共和党の上院議員50人のうち、新たな銃規制の制定に前向きなのは一握りに過ぎないという。そのため民主党は、妥協案としてより狭い範囲の法案を模索している。上院は近いうちに何らかの最終的な合意に達する見通しだ。銃規制論議が活発化することは歓迎すべきなのだが・・・。共和党は、銃規制ではなく、学校の安全対策の強化が最善策だと主張している。既に学校に常駐している武装警官を助けるために、「よく訓練され、武装したスタッフによるボランティア部隊」の創設を呼びかけるなど……。ニワトリが先なのか卵が先なのか・・・。

この事件を風化させてはならない。銃規制にかかわる意見や変革を求める市民の声が政府の行動につながることを期待する。以前の産地情報でも紹介したが、ロシアの劇作家、アントン・チェーホフの言葉を再展示し、この項を終えることにする。「誰も発砲することを考えもしないのであれば、弾を装填したライフルを舞台上に置いてはいけない」。――銃が存在するとそれは必ず発砲される！

## 2) 「米中貿易戦争」 :

覇権国中国における人権や著作権侵害問題を批判して、米国政府は中国への「経済制裁的」な方策を打ち出し、それが米中貿易摩擦を生みだした。最近、バイデン政権は、国内の高インフレ対策の一環として中国への制裁関税を引き下げることを検討しているという。国内景気を憂えるあまりの一貫性のない身勝手さとみるか、それともデカップリングしていた中国がこれ以上ロシアと結びつくことを懸念するための方策なのか、いろいろな見方ができるのだが、何か釈然としない思いを抱く。

米国では秋に中間選挙を控えているし、中国も中国で、習近平総書記が3期目続投を狙う今年後半に開かれる共産党大会を控えている。お互いの利益の思惑が交錯しているということだろうか。

## BB) 産地現状 :

### 1) 原木関係 :

内地挽き大手製材工場向け米国産米松丸太の6月積み丸太のFAS価格は、前月値据え置き。コスト高が継続する国内製材工場は値下げを求めたが、逆ザヤの続く産地シッパーは値上げを要求。双方の要求は対立したものの、お互いが安定供給を最優先した結果、据え置きで決着した。船運賃は3~4月にかけて下落していたが、再度ピークの水準に戻っている。さらに、それに追い打ちをかけるドル高円安傾向。輸入コストは今後も上昇基調となることが予想されている。

今後の産地価格だが、製品価格の下落とともに地合いは弱まっているものの、山火事シーズンを迎えたことで、製品ほど価格は下がらず、原木高、製品安の様相になるとみられている。7月積み価格については、6月積みと同じような交渉が行われると考える。いずれにせよ、製材市況にかかわらず、原木価格は強基調で推移する可能性が高いと予想する。船運賃上昇の傾向も変わらない。

一方、合板メーカー向けカナダ産米松丸太については、カナダ国内市場からの引き合いが強いときく。そのため、輸出価格もカナダ国内向けの価格に呼応し地合いは強い。その上、産地シッパーは今後の輸出向け数量について保守的な姿勢をとり続けている。

### 2) 製品関係 :

現地の製品価格は、5月上旬に下げ止まったとみえたが、下旬には再度下落した。高騰する住宅価格とローン金利が背景となり、先行き不透明感が住宅市況に広がっており、それが市場に影響しているとみられる。因みに米国の30年固定の住宅ローン金利は、年初の3.3%から最近のデータでは6%前後にまで上昇

(2008年の金融危機以来の高い水準)、ここ最近の上昇幅は30年超ぶりで、今後も上がり続けることは必至だ。

輸入米材製品の第3四半期の交渉が大詰めを迎えているが、産地価格は前回に比べ少なくとも数10ドル安になるだろう。ただ、日本サイドは円安急進により、輸入コストを吸収することができず、円貨では逆に上がる結果になる可能性が高い。特に米松製品においては、輸入製品価格が国内挽き製品を上回っている。

### 3) その他 :

以前の産地情報でもお伝えしたように、北米西岸では太平洋海事協会(PMA)と国際港湾倉庫労働組合(ILWU)の労使交渉が5月10日から開始されているが、現段階では特段の進展はなく、現行の労働協約が満了となる7月1日までは妥結に至らないとの見方が広がっている。話がまとまらない場合でも、すぐにストライキに突入するのではなく、交渉しながら作業は続けられるとみられるが、決裂してストライキとなれば、サプライチェーンに深刻な影響が出かねない。今年末まで交渉が長引くとの噂もある。今後とも推移を見守っていく。

## 概況

### 東京15号地 在庫推移 :

2021年 :

7月29日現在	:	米加製品 30,157	欧州製品 27,223	ロシアその他 39,819m3	計 97,199m3
8月30日現在	:	米加製品 39,891	欧州製品 27,783	ロシアその他 52,755m3	計 120,429m3
9月29日現在	:	米加製品 43,162	欧州製品 34,262	ロシアその他 52,647m3	計 130,071m3
10月28日現在	:	米加製品 41,263	欧州製品 36,021	ロシアその他 53,050m3	計 130,334m3
11月29日現在	:	米加製品 34,623	欧州製品 39,454	ロシアその他 57,089m3	計 131,166m3
12月23日現在	:	米加製品 47,500	欧州製品 41,739	ロシアその他 63,407m3	計 152,646m3

2022年 :

1月28日現在	:	米加製品 54,170	欧州製品 53,761	ロシアその他 70,816m3	計 178,747m3
2月25日現在	:	米加製品 46,330	欧州製品 57,875	ロシアその他 71,969m3	計 176,174m3
3月30日現在	:	米加製品 58,991	欧州製品 58,647	ロシアその他 68,594m3	計 186,232m3
4月27日現在	:	米加製品 52,667	欧州製品 58,319	ロシアその他 66,500m3	計 177,486m3
5月30日現在	:	米加製品 50,582	欧州製品 56,610	ロシアその他 70,581m3	計 177,773m3

2022年 :

6月30日現在 :

米加製品 53,520m3 欧州製品 58,838m3 ロシアその他(含む中国) 80,125m3 計 192,483m3

前月比14,710m3の増。米加製品2,938m3増、欧州製品2,228m3増、ロシアその他9,544m3の増。

住宅概況 :

2022年4月の新設住宅着工数は76,179戸。前年同月比2.20%増と14カ月連続で増加した。戸建て分譲と貸家は増加が続いているが、持ち家は21,014戸（前年同月比8.1%減）と不振で、21年12月から5カ月連続で減少。

以上

弊社のホームページもご利用ください。

<https://yuasa-lumber.co.jp>